カブトムシ大変身

この実践は、「飼育をしていたカブトムシに興味をもった４歳児が、友達との関わりや保育者の関わりによって好奇心を膨らませ、より興味を深めていく姿」を捉えた事例です。カブトムシへの好奇心から、成長や住処などの生態への興味につながり、対象に応じた関わりを考える姿を、保育者は見取っています。また、子どもの好奇心を共有し、興味に応えるような環境を工夫しています。

加古川市立両荘幼稚園　　４歳児

６月、入園してから様々な生き物を飼育し、触れ合う中で、次第に保育室で飼育していたカブトムシにも関心を寄せ、好奇心が膨らみ始めた。霧吹きを見つけたＢさんは、保育者に、カブトムシの世話に使うもの、と教えてもらう。霧吹きで土を湿らせるＢさんの姿に好奇心を膨らませた子どもたちが、幼虫が土から出てきたところを見つける。「カブトムシかな」「サナギになるんかな」「変身するんかな」と、世話をしながら友達同士で思いを伝え合ってカブトムシの絵本を見ていた。子どもたちは、世話をすることや観察することを楽しんでいた。

場面１.「サナギになってる！」

・カブトムシが大好きなＡさん。登園してすぐに**幼虫が白くなっていることに気づき、「ねえ！白くなってる！」と、保育者や友達に知らせる。**他の子どもも興味をもち、見ようとする。保育者は、「Ａちゃんよく気がついたね。みんな教えてもらえて良かったね」と、周りの子どもに声をかけた。

虫に詳しいＢさん：**「これはサナギになってるんだよ。だから、触ったらだめ！」**
保育者：「なんで触ったらだめなの？」
Ｂさん：**「触ったら、怪我して死ぬから！」**

・他の子どもたちもそれを聞き、**サナギには触ってはいけないと友達同士で教え合っていた。**その後、Ａさんと Ｂさんは図鑑を出してきて、写真とサナギを見比べながら、**「これと同じや！」「うん、今これやな！」**と話し、観察していた。

保育者の援助

興味をもった時に見られるように、身近な場所に関連した絵本や図鑑を置いておく。

子どもの気づきを認めることで、他の子どもに自信をもって伝えられるようにする。

場面２.「カブトムシが生まれた！」

・昨日からカブトムシが気になり、朝早く登園していたＡさんは、**カブトムシが生まれているのを発見した。土から出ているのを見つけ、Ｂさんに、「生まれてる！！」と声をかけ、二人は大喜び。**
・クラスの中には触ることを嫌がり、怖がる子どももいたが、Ｂさんが、「オスはちっちゃい角を持ったら（手が）痛くないで」と、教えてくれる。
・すると、怖がっていた子どもたちも、「触ってみたい！」「持ってみようかな…」と、積極的に触ろうとしていた。
・「すごい！怖かったのに触れるようになったんだ！」と、保育者が認めると、「うん！ちっちゃい角持てたー！」と、笑顔でカブトムシを見せた。
・カブトムシの家作りでは、Ａさんは、**サナギを見ていた図鑑を持ってきて、**「これに書いてあった！」と、本を見ながら**土や木、エサのゼリーを入れて、カブトムシが過ごしやすい住処を考えて作っていた。**

触れたことを共に喜び、満足感が感じられるように成長を認める。

場面３.「カブトムシって飛ぶの！？」

・子どもたちは、ケースの中に部屋を作ったり餌をやったりしながら、カブトムシと触れ合うことを楽しんでいる。蓋を開けると、１匹のカブトムシが飛び出て壁に留まった。
・子どもたちは、**「びっくりした！」「カブトムシって飛ぶんや！」と驚き、新たな発見を喜んでいた。その後も、「あ！羽、出てきた！」「飛びそう！」と、観察を楽しんでいた。**
・「とべかぶとむし※」の**絵本を見ながら、「こんな飛び方だった？」「うん、羽がバタバタしてた！」「びっくりしたねぇ」と、思いを共有していた。**

驚きに共感し、発見を共に喜ぶ。

※「とべかぶとむし」
作・絵：得田 之久
出版：福音館書店

[考察]

・カブトムシの世話を通して、日々変化していくことに驚きを感じ、心揺さぶられた子どもたち。その変化の過程で、子どもたちの好奇心や疑問に寄り添うように図鑑を置いたことで、子どもたちがますます自分たちの力で調べようとする意欲につながった。
・**友達と観察したり、一緒に世話をしたりすることで、「元気に大人のカブトムシになってほしい。大人になったカブトムシが見てみたい」との強い思いがクラスに広がった。その過程で喜びや驚き、発見を共有していくことで、友達関係も深まっていったのではないかと考える。**